

消費という奴隷

広島 hiro 子

一月の早朝はまだほの暗く、静かだ。

飛丸智子は布団に入ったまま、半覚醒状態でインスピレーションを拾いあつめた。枕もとのメモに、おぼろげな頭のまま、今日のメッセージを殴り書きした。

(富裕層をふくめ、超富裕層と言われる人々にも参加する権利はある。) つぎつぎに思いもよらない言葉が湧いてくる。

いくら富裕層を顧客にもつ信託銀行勤務の彼女とはいえ、超富裕層との縁など、じっさいには無いに等しかった。にもかかわらず、飛丸智子はある確信をもって、かけ離れた世界に住む裕福な人々に思いをめぐらせていた。

(戦争をなくす最短の方法は、欲望の体系を再構築することです。そのためには、同等の機会を世界の隅々にまで与えなければなりません。お金を持つとされるものも、そうでないものも等しくです。)

とメッセージはつづいた。

突然、富裕層らしき白人紳士が、アメリカ系の英語で質問をしてきた。「たった100ドルほどのポケットマネーを、私が投資する必要があるのか？」

と支配層の彼は威圧する。

メッセージと智子は、男女の声がひとつとなる中性的な響きをもって、米国紳士のところに答え始めた。



(もちろん、ポケットマネー革命にあなたが参加する理由は、お金や資産などではありません。超富裕層と言われるあなた方は、毎年数千億ドル、いや数億ドルという株主配当を手に入れます。

今の世では、働かずして生涯裕福に生きる0.01%の支配者層と、一生働いて消費の払いに追われる労働者99%に、完全に分かれています。99%のほとんどの民は、知識が偏在するがまま、自分が支配されていることにすら気が付かない、だからあなたが少しの投資などせずとも・・・)

黙って聞いていた米国紳士が、答えを待たずして横やりをいれてきた。「ちょっと待ってくれたまえ。こんなことは言いたくないが、消費の奴隷として、わたし達の支配が進みすぎたことを否定したりしない。しかしそれは資本主義の世において当然のことだ。モノを買い、所有し、自分へのご褒美をあげることが民のニーズであったはずだ。その社会の欲求に応えただけではないか。メディアを駆使するのだからって企業努力だ。格差が広がったと言って、私たち企業がわの責任とは言わせない。」

(あなたの言われるとおりです。どちらにも非はあるもの・・・あなたの富はあなたがたの努力の結果です。しかし、すべての富も成功も、幻に過ぎません。そして、最後にあなた方が欲するものが、ここに用意されています・・・)

体格のいいアングロサクソン系の白人は、声をあらげた。「私はすべてを所有している。金で買えないものなどない。私はすべてを支配しているのだ。」

(お金にうもれたあなたは、本当の愛を知らない。あなたが所有する1億ドルのクルーザーよりも、愛し信じることのできる人間は、あなたにとってこの世でいったい何人いるというのでしょうか。)

「私は大企業を所有し、何万人もの労働者の上に君臨している。世界中に消費の奴隷を持っている。買収をかさね唯一となり、国さえもひれ伏す。もはや敵などいない。」

(今はそうでしょう。しかし、すべてがポールシフトするように、逆転する 때가近づいています。

あなたの大事な大企業が、これから一度に崩壊していくのを、唯一止める方法を理解しておられますか。あなたやあなたの一族が永遠に生き延びる道が、幸福へ続く道が、どこにあるのか理解されているのですか?)

「私がお金をどれほど寄付しているのか、お前は知るまい。貧乏人では寄付もできないが、私はたくさんのお奉仕をしている。浮浪者にパンと毛布、寝るところまで与えている。私は、神よりも以上の施しをやっているのだ。」

（あなたはそれが何を生むか知っておられます。命の灯が消えそうなときに与えるパンと葡萄酒、愛は、生きる力となります。しかし、それ以上の助けは、奉仕とは程遠いものに変化します。依存と退行です。

あなたはあなた自身の妬みから、人間の自立と成功をはばむため、あなたはあなたの恐怖から、殺そうと思われぬために奉仕者のか皮をかぶり続けるのです。

あなたに感謝をささげる、あなたの奴隷をつくるために・・・)

「……くそ、なぜ心の声が言葉になるのだ。こうなれば何も隠すことはない。そ、う、だ、私は知っていたよ。祖父が経験してきた、あらゆる逆境こそが成長の糧だということをね。

（素晴らしいおじい様だったのですね。あなたはおじい様似たなのでしょうね。）

そう話しかけられた若い米国紳士は、上着のポケットから祖父の形見である懐中時計を取り出すと、大きな手で握りしめた。

「私は祖父にかわいがられた。私は祖父が世界で一番好きだった。祖父は事あるごとに民のことを考えるようにと私に話していた。今あるのはすべて神のお陰であり、祖父は神の子である民にも感謝していた。そして民に寝どことパンを用意するのと同じほど、いやそれ以上に教育こそが大切なのだと言っていた。そして祖父は死の床にあっても幼い私に言い続けていた。社会に奉仕せよと。

……しかし……そばにいながらも偉大すぎた祖父に、私が似ているなど簡単に言わないでほしい。私は民を憎んだのだから。私は祖父とは全く逆のことをしたのだ。私はまるで祖父のようにはにはなれなかった。私は一度たりとも、感謝という気持ちがどんなものがわからないのだ。」

そう言うと、米国青年は初めて首をうなだれた。

（だからこそ、ポケットマネー革命はあなたの必要を満たす工程なのです。時間の猶予はありません。これから普通の人々を侮ることは身を亡ぼすことにつながります。あなたが巧妙に罫を仕向けたように見えて、もうすでに崩壊は目に見えないところで始まっているのです。

そして欲望の華が世界に広まったとき、一瞬にして世界は変わるのです。

奪い合う世界の終わりを告げるからです。矛盾にみえますが、これは必然です。

あなたが神を信じられなくても、聖書の予言どおり奇跡が行われることは、知っているでしょう・・・)

聖書の話しになると、智子はメッセンジャーの意識とふいに別々になった。

智子は米国紳士と同じく、神の存在を信じていなかったのだ。